

南支

歩兵第八十五連隊南支作戦

福島県 大竹清照

昭和十八年初頭を迎えて、戦火に曝された金華市街にも急速な復興のきざしが見え始め、日を追うごとに街は旧態を取り戻して行った。戦火を逃れて遠く郊外に逃げ去っていた住民達も続々と帰城して、市街は連日賑わいを見せて来た。師団の警備体制もこのごろは既に完璧となり、市内の外出には兵隊達も帯剣一つで出掛けられるようになって来た。中隊第二の長期駐屯地となった金華県城である。

金華市は市街周囲（一キロ四方）を城壁にて取り囲

まれていて、城内に入るには東西南北の何れかの城門をくぐらなければ市街には入れなかった。西方は金華江という豊かな流れに恵まれ、その流れを利用して遠く杭州、上海までも交通や交易を果たすことができ、当時人口は十万人で、城外の土地は豊穡で、産物も多く栄えた地であったと言う。

春には郊外の地には桃の花が咲き、河原には柳の芽がふき出し、野花が咲き乱れ、何ともいわれない楽園の地でもあった。

戦火から平和を取り戻したこの地で、師団は今までの戦闘で減退した戦力増加のため、健兵教育対策に取り組み、武術奨励のための銃剣術大会、射撃大会、演習等を催し、日々これ、戦場の心構えを養成していた。あの陽春の下、空にはひばりがさえずり、見渡す限り

広い丘には桃の花、そして菜の花、そこを駆け廻って演習はいまだに忘れられない思い出である。

昭和十九年四月下旬、十中隊は第二十二師団の南支への転進のため、金華の守備を第七十師団の一部と交代して転進準備に入った。「隠密裡に事に当れ」という命令で、兵舎内では各自、私物の整理が始まった。焼却すべき物、内地へ発送を依頼する物、兵舎内外の清掃等、十日間ほど多忙を極めた。

五月十一日、第三大隊は連隊と共に金華駅を出発、上海、江湾鎮に到着した。輸送船を待つため江湾東兵舎で宿営に入った。このころ、軍は輸送船団の出航等については頭を痛めていた。東支那海方面を通過するには敵の飛行機または潜水艦が待ち伏せして、輸送船は彼等の格好の餌食である。

軍首脳部が部隊の輸送に頭を痛めているのに反して、兵隊達は至極楽天的である。私達は自分の行先も軍の目的も知らされていなかったために各人各様に想像を働かせ「日本へ凱旋するんだ」「いや南方の島らしい」とか思い思いに行先を想像しながら話に花を咲

かせ出航の時を待った。

五月二十二日、いよいよ乗船の命令が達せられた。夜に入り部隊は乗船のため棧橋に向かう。今にも一雨来そうな漆黒の闇夜であった。歩兵第八十五連隊第三大隊外第二大隊の一部千数十名の乗船した船「洋第十二号丸」は、民間から徴用した船で大きさは約三千トン級、いよいよ暗い海に向かって出航した。上海の灯りが望めるが海上に遠のいていく。長い夜が明け、真っ赤な太陽が水平線の彼方から昇り、灼熱の太陽が甲板を焼く。どのぐらい南下したのだろうか、あたり一面見渡す限りの大海原である。船尾の後の方に真っ黒く「まぐろ」の大群が船を追って来るのが見えた。陸育ちの自分でも船酔いには自信があったので、連日、対空、対潜監視の役を引受けていた。

二日経ち三日過ぎた。さすが陸の猛者達も船酔いには勝てず、船中のあちこちらで「ゲーゲ」と悲惨な有様である。そのうち「オーイ島が見えるぞ」という声に皆甲板に出て見る。「ここは一体どこだ」。船が着いたところは台湾の高雄港であった。台湾だった。それ

じゃ日本じゃねいか。俺達はここへ上陸するのかな、
「馬鹿いなよ。もっと南の方に行くんだ」。自分達の
行き先を知らない兵達である。勝手な想像をして思
い思いの話をしている。

碇を下ろして停泊した艦の周りには、たちまち数隻
の物売り船が集まって来て「バナナ買わないか」「飴
買って」と呼び声を上げている。自分達は出発前に給
料を貰ったばかりだったので、あちこちでバナナやキ
ャラメルを買いだした。安い安いバナナが大きな籠い
っぱいで五円だ。小隊全員でも食べ切れぬ程。飴菓子
等、一円ほど買ったら両手に抱えるほどきて余すぐら
いであった。

「どうしてこんなに安いのだろう」と聞いたところ、
最近船の便が悪く、内地へ産物を送り出すことが出来
ないので、品物がダブ付いて購買力が落ち台湾に寄港
する兵隊さん達が最高のお客様だという。

三日ほど高雄に停泊した我々は、再び碇を上げ出航
し、敵機または潜水艦の攻撃から逃れて、六月五日香
港を経由、広東省黄埔港に上陸し、翌日広東中山大学

に向い、ここで宿営をする。第二十二師団は「と号」
作戦準備のためここ中山大学を集結地と定め、輸送船
の都合で未到着の部隊を待つため、しばらくここで作
戦準備の休養ということで大学学生寮の一角に（第十
中隊も）宿営した。

建物は鉄筋四階建てでかなり大きな建物である。ここ
中山大学は抗日運動が最も激しい学校で、中国抗日学
生運動はここから始まったといわれていた。「豹子文」
「豹子胡」という中国華僑の兄弟が成功をし、故国に
何か記念すべき事業をと「ボン」と出した資金でこの
大学が出来たのだという。何ともスケールの大きいの
には驚嘆のほかはない。敷地は何と四キロ四方で、当
時の東大の何十倍とか、まさに想像も出来難いもので
あった。

庭園には幾つもの池があって、夜になると、ここか
ら数十いや数百匹の食用蛙のうなり声が合唱団となっ
て、鳴きさげぶ声が賑やかなものであった。

船舶輸送は第一次、第二次、第三次と行われ、第一
次輸送は歩兵第八十四連隊、第二次輸送はわれわれ第

八十五連隊、共に無事輸送には成功したが、第三次輸送の歩兵第八十六連隊は東支那海に入った途端、敵潜水艦の攻撃を受け輸送船は沈没し、兵員は海上に放り出され遭難するという羽目になった。幸いに味方の船に救助され、約七割ほどの兵員は助かったが後は海没してしまつた。

兵器、弾薬、馬匹、装備品の全てを失つた歩兵第八十六連隊の将兵は、七月初旬、丸裸の状態で九竜に着き、中山大學に集結した。ところが運の悪い時はどこまで悪いのか、中山大學宿舎に入ったその晩、こんどはB24爆撃機の空襲である。

七月七日夜半、突然！敵機襲来の報に「全員防空壕に退避せよ」という命令が出た。第十中隊の各小隊は、宿舎横の小松林台地に避難して、過日自らの手で掘つた蛸壺壕に入って難をさける。空は月の光で青白く澄み渡っていて、雲一つない。ザア！とまるで笹藪の中をすべり下りるような風を切る爆弾の落下音が聞こえたかと思うと、ドカン！ドカンと鼓膜を突きやぶるような凄まじい炸裂音が、あちこちに響き渡り、土砂

が蛸壺壕に入っている自分達の上に雨のように降り掛つて来て、頭を上げる暇もない程である。

広東郊外にある日本軍飛行基地から、数十機の友軍戦闘機が飛び出した。「衆寡敵せず」わずか数分の戦闘を交えたかに見えたが、たちまちどこかに姿を消してしまつた。B24爆撃機が十数機飛来し爆弾の雨を降らせる。日本軍対空陣地から探照燈が大空に向かって光を突き刺し、高射砲が盛んに射ち出された。キラッ！と夜空に反射して敵機に向かって高射砲の弾丸が炸裂しているのがわれわれの目にも映つて来たが、飛来して敵機のはるか下の方で炸裂してよう、B24の姿はいぜんとして悠々と飛行を続けており、実に歯がゆい思いだつた。空襲は約一時間ぐらひであつた。しかし蛸壺壕の中に入っているわれわれには実に長かつた。

敵機の去つた後、直ちに各分隊ごとに点呼を取り、被害の有無を調べたが異状はない。他の部隊では蛸壺壕に直撃弾が命中して一片の肉塊も残さず爆死した者もあつた。この夜の爆撃で一番被害を受けたのは師団

輜重隊で、数十頭の馬が馬匹舎ごと吹き飛ばされてしまった。また第八十六連隊にも多数の死傷者が出た。空爆という経験のなかった中隊の兵士たちは、初めて空爆のおそろしさを味わったのだった。

この時のことを防衛庁戦史室の公刊戦史によると、

「B 24一五機が約一〇回に渡り一・二機づつ波状的に天河及白雲飛行場中山大学付近の兵営を爆撃す」とあり、敵は現地人を使った精細な偵察と綿密な計画

により兵舎の建物を避けて人員と馬匹の消耗を目的とし、退避している蝸壺と厩舎を集中的に狙ったらしく

「戦死二十三、戦傷九十五、戦死馬七十四、戦傷馬六十四」とあり事後の作戦準備、とくに輸送に支障を来たしたことは確かである。

歩兵第八十五連隊は第二十三軍司令部の命により師団とは別行動をとり、単独に作戦行動を準備していたのである。

八月上旬、中山大学の集結地を出発した連隊は広東の南東江門に上陸し、新会県城を占領していた。第三大隊は「新会」より「小梅」に移動して「ト号作戦」

開始の命を持っていたのである。

九月九日「ト号作戦」開始の発令があり、ここに南支転戦の最終目的とされた広東広西両省の打通作戦の火蓋は切られた。橋爪大隊長は「必勝を期すと」大訓示を行い、激励の言葉とともに各中隊は一斉に前進を開始した。大隊の尖兵は第九中隊、右翼中隊は第十中隊、左翼に第十一中隊、本部は第十二中隊大隊本部第三機関銃中隊、後尾は大隊砲および通信担架等で、発進と同時に戦闘体形をとって行進した。歩兵第八十五連隊の前衛として起用された橋爪大隊長は、鬪志満々、

「羅定城の一番乗りは是非共我が第三大隊で」

と張り切っていた。部下の中隊長を叱咤して強行軍を敢行されたので、尖兵中隊や両翼の主力小隊など駆逐のような速さで行軍して行かなければならなかった。

九月十日、影葉里に着いた大隊は、さらに前進し、夜行軍をして十一日には鶴山県城西北約八キロの地点まで進出を果たし、白村という部落で二昼夜の休息をし、一夜明けた十二日の早朝、大隊は新興県城攻撃の命令を受け、白村を出発する。尖兵は第十中隊、行軍

は相変わらずの強行軍だ。兵隊達は昨夜遅く白村に着き、携行食の炊飯やら装備の点検やらで、睡眠時間はわずか三時間ぐらいであった。睡眠不足の兵隊の眼には南支の真夏の太陽の光が突き刺ってチカチカと目に螢が飛ぶようだ。歩度を少しでも緩めようなら、後方の大隊本部が追いついて来るので、尖兵のわれわれも必死で足を速めなければならなかった。

「オイ大隊長は馬鹿に張り切ってるなあ！」

「そりゃそうさ、何だって五色の雲を見たんだもんなあ！」「五色の雲って何だ！」「虹のことだろう！」

「オイオイ！虹は七色じゃ無いのか！」

「じゃあ！多分寝ぼけたんだろう！」

こんな急行軍の中でも、兵隊たちは冗談口を飛ばしながら歩いていた。

羅定県城へあと二キロほどのところで、敵の反撃を受ける。中隊は直ちに展開して攻撃を開始した。後方の大隊本部も反撃を受けているらしく、近接して彼我の銃声が激しく交錯している。飛弾の中を第十中隊の各小隊は、南支特有の乾いた赤土の原を砂煙を上げ

ながら、競って羅定城に突入して行った。定かな時間は分からないが多分昼ごろではなかったろうか。腹がへっていて、腹の虫がグーグーと飯の催促をしている。後続中隊や大隊本部も間もなく、羅定県城に突入を果たす。各隊は敗敵の掃蕩戦に入り、県城内を索敵して歩く。午後四時近く、歩兵第八十五連隊の軍旗が羅定県城に入城するというので、第三大隊は県城の外に出て、その夜は城外約一キロほど離れた民家に宿営した。

翌日、師団司令部より命令があった。

「敵第三十五集団軍司令部は泗綸墟にあり、第三大隊は直ちに泗綸墟に向い該敵に当り、これを撃滅して泗綸墟を占領すべし」

というのである。勇躍した橋爪大隊長は部下の各中隊を督励して泗綸墟に急行する。羅定の周辺に至った折、敵の反撃は激しく、P51戦闘機の攻撃を受け、中隊は地上の敵ばかりでなく、空からの敵襲にも油断が出来なかった。泗綸墟に大隊が突入を果たした時はすでに敵の影はなかった。

市街に入って見ると主な建物は友軍機の爆撃で破壊

され、廢墟と化していた。泗綸墟の掃討もそこそこにして第三大隊は山岳地帯へと進攻して行った。九月九日に小梅を出発、彰化菓里、鶴山、新興、羅定さらに泗綸墟へ、図上約百九十キロ、実際には二百二十三口は歩いたであろう。

歩兵第八十五連隊のこの進攻の速さは、方面軍の予定日数の半分で踏破したもので、さすがに第十三軍下ピカーの師団だと賞賛されたものだったが兵隊の苦勞は並大抵のものではなかった。連日の強行軍と寝不足、頭からずぶぬれになっての雨の中の夜行軍、戦闘と疲勞が重なって頭はボオツとし、目はチカチカして目に螢が常時飛んでいるようだった。南支那那夏の太陽が容赦なく頭上を照らしている。汗に沁る目を空に向けて兵隊が「オイ！五色の雲だ！」という。キラキラと太陽の光を反射させた雲が遙か西の空に浮遊して行く。「五色の雲というのは、こういう状態の時ではなくては見られナイんだなあ！」兵隊たちは空を見る五色だか七色だか雲に反射する太陽の光が痛い程目に入る。「われ戦いに勝てり！」汗で目に映った複雑な空

の色は、前途の多難を警告しているかのようでもあった。

泗綸墟を出発した第三大隊は、広東、広西両省の省界、嶺溪に兵馬を進めていた。不毛地帯とでもいうのか、広東省西南の山岳地帯は切り立ったような岩肌と赤土の塊で、青い葉を繁らす樹木の姿は皆無といって良いほどであった。

九月下旬から十月の初めにかけて、南支の暑さはまた格別であった。休憩する木立のない山の中を、兵隊たちは重い装具を背負い痛む足を引摺って歩いた。山間の小さな部落を見つけては食糧を調達するのだが、山の中の小部落では食糧になるような物は残されてなく、住民の避難した家は廢墟と化し、何だか空気までもカビ臭く、兵隊たちは空ッ腹をかかえて連日山中を歩き廻ったのである。

第十中隊は金華出發以来、乾安衛中尉が中隊長として指揮をとっていたが、去る嶺溪付近の激戦中に負傷し、以後、田中正直中尉が中隊長代理として指揮をとっていた。

歩兵第八十五連隊は筋竹扨を経て嶺溪県城を攻略することになり、能勢連隊長は隷下の各大隊に対し嶺溪攻略の命令を下達した。第十中隊は大隊の後衛として大隊本部の後尾二キロ地点を筋竹扨方面に進軍していた。連隊は第一大隊を前衛として嶺溪県城をその日夕刻には占領し、軍旗を先頭に堂々と県城内に入場を果たしていったのだった。

ちょうどその頃、第十中隊は山の中の大きな湖のそば銀杏の木の根元で約二十分ほどの休憩後、再び大隊の後を追って行軍を開始したが、行けども行けども大隊の後尾の姿を見つることができず、山中で道に迷い、二日一晩歩き通し、飲まず喰わずの状態で坡塘墟の渡河地点で大隊に合流、師団の渡河を援護するため現地付近の民家に宿営となった。一泊の宿営に身を救われたようで、泥のように疲れた兵士は死んだように眠ったのである。

十月十六日第三大隊は広西省の敵拠点「平南」に向かって進軍した。第十中隊は大隊の右翼を「潯州」（柱平）に向かって進んでいた。平南平野に出たとはいえ

至るところ二、三十メートルの丘陵が延々と続いて、「丘を越え、丘を越え」という歌の文句のように登ったり下ったり、の行軍であった。ただ広い広野は一面赤土の茶褐色で雑草さえも生えてない。全く無味乾燥の砂漠地帯を想像させるほどである。一晩中行軍を続けて潯州対岸の「鬱江」近くの山地帯へ入り、大隊に合流したのである。

この地点に至り地形偵察の命を受けた第九中隊が一部の兵を渡河点に残し、潯州に単独渡河を執行して行ったということがわかり、橋爪大隊長は心配して各中隊に対し直ちに第九中隊の後を追うよう命令を出した。わが中隊も休む間もなく山中を潯州渡河点に向かって急進して行った。単独渡河を執行した第九中隊は桂平県城六キロ「沙平」付近まで進攻して行った。

当時、重慶軍はこの柱平地区に第四戦区の精鋭部隊、正規軍四個師団を当てて、一大防備態勢をとっていたが、日本軍の来襲を知るや十月十九日ごろから大反撃を開始したのだった。第十中隊のわれわれも大隊の尖兵として平南の丘陵部を猛行軍をして行った。

敵の攻撃は盛んになりP51戦闘機は常時飛来し、その都度中隊の行軍の足を止められ予定通りの進行が出来ず、部隊幹部はイライラするばかりであった。大隊が「貴県」西方（約二十キロ）の「蒙扞」付近の山岳部に入つて渡河点を偵察しているころ、第九中隊は「柱平」方面で敵の猛反攻とB51の機銃の雨にさらされて大奮闘をしていたのだ。このような状況を知らされた能勢連隊長は急遽独立混成第二十三旅団司令部（下河辺少将）に第九中隊を同旅団の指揮下に編入させることを進言し了承を得たのだ。ここにおいて十月二十四日第三大隊は（憲）兵団長の指揮下で行動することとなる。

蒙扞（蒙墟）の戦闘にて

昭和十九年十月下旬、暗闇を利用して大隊は潯州の渡河点から対岸に渡つた。第三大隊の各中隊は渡河の順番待ちのため河畔の松林の中で敵機の目をさげながら待機するが、対岸の敵はわが軍の渡河を阻止しようと盛んに銃砲火の雨を降らせていた。真つ暗な闇の中、敵銃火の火花が見える。第二十二師団、工兵隊がこの

銃火の中で、必死に渡橋工事を敢行している。時々闇を裂く鋭い掛け声が響いて来る。

やがて東の空が白み始めた。渡河した先頭部隊が敵兵を駆逐したのか、第十中隊の順番が来て、渡河を始めたころには敵の銃声は聞こえなくなっていた。

対岸に出ると、そこからは坦々とした軍公路が遠くの方まで伸びていた。軍公路は至るところ寸断破壊されている。多分日本軍の進攻をさまたげるために敵が破壊したものであろう。軍公路に沿ってしばらく前進して行くと、右手の方に山波が見えてきた。七、八百メートルぐらいの山が幾つか続いている。われわれ原小隊はその山に向かつて山道を入つて行つた。だんだら坂を登ると中腹に出た。道には幅一メートルぐらいに約五、六センチの石がギッシリと埋め込まれてあり、さながら舗装道路といったようなおもむきがある。

約一時間ぐらい登つたらうか、頂上の高原地帯といったところに出た。前方の山の中の道を隊列を作り避難して行く土民の姿が見える。小隊はさらに高地を求め二、三十メートルほど高い場所に出た。ここからは

眼下に「蒙圩」の部落が一望できた。水田や畑等パノラマを見るようである。

この高所のあちらこちらに蝮壺塚が掘ってあり、日本軍の姿が見える。小隊が近づくと彼等が手を振りながら飛び出してきた。独立混成第二十三旅団(憲兵団)の兵たちであった。中隊のほとんどが激戦に次ぐ激戦で戦死し、「われわれは十数人でこの山にきて、後続援護部隊の到着まで現地を死守せよ！」という命令で、ここに蝮壺塚を掘り山頂を死守していたという。

敵との交戦で弾丸もなくなり、手榴弾も使い果たして、敵が来た時、石を手榴弾代わりに投げて戦ってきただという。前日の雨のためズブ濡れで蝮壺に入って夜を明かしたが、すでに三日三晩飲まず食わずで「今度敵が来たら全員白兵戦で戦い戦死しよう」と話してたところで貴男達が助けにきてくれて本当によかった」と「地獄に仏とはこのことをいうのかなあ」と涙を流して男泣きしていたあの姿は五十年経った今でも忘れることができない。

彼等と交代して前原小隊は同高地の守備についた。

十月末の山頂の空気は冷え冷えとして肌寒い。時折雨が下から吹き上げられてくる。自分達は土民が捨てて行った布団を拾って来て頭からかぶり、彼等が掘った蝮壺塚に入って夜を明かした。

二日ほど雨が続いたが今日はどうやら天気のようにだ。午前九時頃キーンという金属音を響せてP51戦闘機が飛来してきた。と、どうしたことが、下の部落目掛けて急降下したかと思うと「バリバリ!」「バリバリ!」と機銃掃射を始めた。部落内にいた中国兵が蜂の巣をつついたように四方に逃げ廻る姿が山頂から手に取るように見える。米軍機の誤認攻撃である。同志の相打ちである。

米軍機は蒙圩部落にいるのは日本兵だとのみ思っているのか執拗に反復攻撃を繰り返している。山頂から見ている自分たちは、まるで戦争映画でも見ているようだった。

昭和十九年十月三十日、命令が出て前原小隊は山を下りて蒙圩の部落に下りていった。昨日のP51の攻撃で死亡した中国兵の死体が部落の前の巾三メートルぐ

らしいの小川に累々と横たわり、P51の攻撃の凄まじさを物語っていた。また(憲)兵団の部隊が爆撃された時の穴が十数カ所もあった。五百キロ爆弾を落されたのだという。爆弾跡に雨水が溜り、クリークのようになっていた。蒙圩部落にいた敵はすでに部落を撤退して、前方七、八百メートル先の大きな竹林に陣地を構築して、日本軍の進行に備えていたのである。

小隊は部落の中で朝食をとり、休憩していた午前十時ごろだった。またP51が飛来してきた。今度は我々が狙われている。自分は部落の左方のクリークの端に伏せて退避したが、機銃はクリークに水しぶきを上げて通りさつていく。幸いにも機銃掃射の弾脚の間の中で辛うじて命びろいをする。

約一時間近く敵機の攻撃を受けていたが、やがて敵機も去り、いよいよ午前十一時〇分前原小隊に「前方竹林の陣地を攻撃せよ」と命令が出た。前原小隊は直ちに攻撃態勢に展開して部落を出た。真正面が竹林である。正面攻撃は無理である。前方百メートルぐらいのところは饅頭形の墓地がある。前原准尉はこれを遮

敵物として進んだ。第一分隊長根岸軍曹、一番大竹兵長、二番小椋兵長、軽機射手、三番阿部上等兵と分隊長がひとかたまりで墓地の陰に入った。この時、敵の銃砲火ますます激しく饅頭形の墓地の上を削り取つてもうもうと土煙が上がる。分隊長、根岸軍曹がこの弾幕の中を飛び出そうとして、小隊長に止められた。ここから少しでも出たら蜂の巣のごとく、やられるのは明らかである。敵は数箇所から機関銃を掃射している。

根岸軍曹は昨夜、小隊長の前原准尉に、分隊長の指揮についてひどく叱られて頭にきていた。今朝出発する時、真新しい下着に着替えると「今日は死出の旅だ」ともらしていた。飛び出そうとする根岸軍曹、「駄目だ!」という小隊長と激しく口論となった。しかし誰の目にも、飛び出せるような状況ではない。

あまりに激しい敵銃火のため、小隊は五十メートルほど後退して、部落右側の小川の土手沿いに前進することにして、一人づつ墓地の起伏を利用して小川の線まで下がった。小川には中国兵の死体で埋もれるほどだったが、自分達は死体をよけながら小川の中を前進

した。

敵陣地三百メートルぐらいのところまで前進する。ここから一気に敵陣地まで突っ込むんだと根岸軍曹がいう。自分も飛び出して後を振り返って見たが私達二人だけで後続の兵隊たちはまだ姿が見えない。根岸軍曹に続いて田圃の中を駆けて行くのだが、ここ二、三日の雨降りで田圃の中はぬかっついて思うように走れない。三十メートルも駆けると足がとられるので息が切れて田圃の中にバツタリと倒れてしまう。

敵弾はバシ！バシ！と竹を割るような鋭い音を発して田圃の中に落ち、自分の進んで行くところに水煙が上がる。また立ち上がって敵陣地に向かって進む。幾度か田圃の中を転がりながらも敵前二百メートルぐらいまで進んだ。私の横を前原小隊長が追い抜いて行く。

「大竹、大丈夫か。やられるなよ！」

と大声をかけて行つた。自分はその声に励まされて田圃の中を駆けて敵前百メートルぐらいのところまで進んだ。そこからは田圃の湿地が切れて畑になっている。敵の銃火はいよいよ激しくなっていたが自分はもう神

経が麻痺してしまつて恐怖心はまったくなくなり、ただ突撃地点の竹林とその中に赤く見える煉瓦造りの敵地に「どうたどりつけば良いか！」とそればかりの思ひだつた。

その時である。「パパーン！」という敵迫撃砲弾の炸裂音が聞こえたかと思うと「ああっ！」という声が出た。前方十メートルぐらいのところで根岸分隊長が血みどろになって倒れている。自分は急いで分隊長のそばに駆けつけ、倒れている分隊長を引き起こして「しっかりして！」と声を掛ける。分隊長は首を曲げて「あ、あ、」というだけ。見ると右の脛の部分が迫撃砲で半分ほど飛ばされてなかった。口から鮮血が吹き出し、自分ではどうしてやることもできない。左前方に見える大隊本部に向かって衛生兵を呼んだ。

青木衛生兵が駆けつけてくる。敵迫撃砲弾が「ヒュル……」「ヒュル……！」と不気味な飛弾音を立てて頭上をかすめていく。そうこうしているうちに根岸分隊長は息を引き取つた。

自分はさらに前進して二十メートルほども行つた

か！。そこに前原准尉が腹部をやられて倒れていた。敵前四、五十メートルのところである。敵兵がうようよいるのが「ハッキリ」と目に映る。とにかく敵陣に突っ込まなければと、夢中で敵陣地に突っ込んで行った。敵は不気味な日本兵に浮足立って先を争うようにして後方の山手へ敗走していく。私は今までの緊張が取れたのか、その場にドッカーリと尻餅をついてしまった。

そこへ佐藤三男上等兵が駆けつけてきた。「オイ！大竹敵陣地だぞ！」「ハッ！」と気を取り直して、右前方を見ると、迫撃砲をかついで逃げて行く敵兵が目に入った。「コン畜生」と佐藤上等兵と二人でこの敵を追いかけたが、敵は死にもぐるいで逃げ、とうとう逃がしてしまい、二人して地だんだを踏んで悔しかった。

しかし敵陣地には二、三百挺ほどの小銃と無数の弾薬が放棄されてあった。敵兵は全て逃亡したのか姿が見えない。ここで初めて自分たちは敵陣地を占領したのだと思った。フト見ると佐藤上等兵の小銃の床尾板

が半分になっている。敵の弾丸で飛ばされたらしい。「よく体に当らなくて良かったね！」と二人で大笑いしたが、そう言えば私も先程「右足に強い衝撃を感じたが」と思い足を調べたら、編上靴のカカトの部分が弾丸で飛ばされていた。足には別状がなくて何よりだった。

早速、左前方約三百メートルぐらいの丘の上に立っている橋爪大隊長に戦闘の状況と前原准尉、根岸軍曹の戦死の報告をし、元のところへ帰って、前原准尉、根岸軍曹の死体の処置をしなければと思っていたら、後続小隊が到着したので、戦況を田中中隊長にも報告する。

この戦闘で前原准尉、根岸軍曹、阿部上等兵三人の尊い戦死者を出した中隊は、戦い終了後、全員哀惜の涙のうちに遺骸を茶毘に付して敵陣地前の畑の中に埋葬した。

南支那随一の砂糖の集荷地でもある貴県城を占領し、さらに柳州、遷江、賓陽、南寧そして仏印国境鎮南関を通り「明号作戦」のため仏印に入り、昭和二十

年三月十日仏印第三次進駐を果たし、さらにはビルマ夏季攻勢作戦へと進軍は続く。

湘桂作戦従軍記

静岡県 木村二郎

昭和十八年四月十八日、連合艦隊司令長官山本五十六大將、ブーゲンビル島で撃墜され戦死の悲報を聞いたのは、私達初年兵がまだ中部四八部隊で、南支戦線に派遣されるための基礎教育を受けている時だった。

其の頃、当時の新聞報道は連戦連勝で、国内は歓喜に沸き、戦局全般の推移など私達初年兵に判るはずもなく、降って沸いたこの悲報を、郷里から再度面会に来てくれた母親から聞き、ただならぬ酷しさと緊迫感を知るのだった。

やがて五月末になり、野戦の現地から私達第二中隊の初年兵受領に来ていた松坂・浦岡軍曹の指揮に従い、駆逐艦に護衛された「淡波丸」（二万二千八百トン）

の貨客船、最新鋭船に揺れて十一日間の航海を経て、広東省黄埔港に上陸した。

各隊はそれぞれ分散し、大隊本部は石龍市内、私達第二中隊は本部より五百メートルほど北東の東詰に駐屯した。私達のために設置してくれた鉄道廢舎にひとまず落着く。訓練科目が進み数日の後、一キロほど離れた小高い西湖障地に野営する。ニッパ椰子の葉で屋根を葺き、竹材を組合せた簡素な営舎に入り、少し下った辺りを見渡すと、灌水池付近で野放しの水牛が草を食んでいる。長閑な農村であるとはいえ場所は敵と指呼の間の第一線の原野であり、油断のならない真剣な訓練の毎日だった。

三カ月の擲弾筒の第一期検閲も終り、続いて狙撃手教育の期間中、一等兵に進級、星も二ツになって自他共に嬉しい一端の兵隊となった。そして初めて経験する広九打通作戦（香港・九龍と広東を結ぶ鉄道）に参加、壮絶で悲惨な戦闘を実感したのも秋も深まる十一月下旬だった。

短い十日程の作戦も終り、帰隊すると即、移動命令